ベトナム・フィールドスクール　講義録１
1 月 12 日　9:00 – 11:00

ベトナムの諸民族とドイモイ下の民族政策の諸問題

伊藤正子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

今回、ホアビン省のムオン族地域で実際に国際援助が行われている現場を訪問するにあたり、背景を理解しておくために、ベトナムの少数民族全体について解説し、少数民族政策の歴史的展開を理解してもらうことを念頭においた。

最初にベトナムの国定少数民族 54 種類を、語系別・地域別に分類し、政治的・社会的・文化的特徴、国家との関係のあり方と歴史などについて解説した。東北地方のタイー族・ヌン族、西北地方のターイ族やモン族、中部高原のマライ・ポリネシア系とモン・クメール系の先住民、中南部のチャム族、メコンデルタのクメール族、そして都市を中心に居住する華人などである。政府との関係が良好な民族と、宗教などと結びついた分離運動があるとして警戒されている民族がおり、「少数民族」と一言で表されるような簡単なものではなく、土地をめぐる問題などキン族と少数民族、あるいは少数民族同士の利益配分において多くの問題が起こっていることについて説明した。

また共産党の少数民族政策史を現在までたどり、ドイモイ後再開された少数民族重視政策により、少数民族地域にも貧困削減を目指して経済的援助が大規模に行われるようになったことを解説、それが正の方向に働いている地域と、そうでない地域が出ていることの原因を、民意の吸い上げのルートがあるかどうかという側面から解説した。それは先に述べた国家との関係の遠近と連関している。

また 1990 年代以降の特徴的な民族政策として、「民族法の策定」と「民族分類の再確定」政策を挙げ、鳴り物入りで登場した両者が結局うやむやの尻すぼみになってしまった原因として、上から与える民族政策の限界を指摘した。

（記録：伊藤正子）